

総合地球環境学研究所（地球研）中国環境問題研究拠点は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の現代中国地域研究推進事業の一環として、全国6つの大学や研究所に設置された研究組織の1つです。現代中国地域研究は、日本における現代中国研究のレベルアップ、学術研究機関間のネットワークの形成、次世代の研究者養成を目的として、地球研の他に早稲田大学、慶應義塾大学、東京大学、東洋文庫、京都大学に設置されています。

地球研では地球環境問題の解決に資する複数の研究プロジェクトが中国各地域で実施されています。この研究拠点では、これら地球研の研究プロジェクトの成果を土台に「開発による文化・社会の変容」という視点で、中国の環境問題を自然・人間文化の両面にわたって相対的に捉えようとしています。具体的には毎年中国環境問題に関わる異なるテーマを設定し、各種研究会やフォーラム、国際シンポジウムを開催しています。2007年度は、「水」、2008年度は「食と農」、そして本年度は「都市化と環境」をテーマとしました。今後も「環境と健康」、「文化の多様性」などをテーマとしていく予定です。

また、国際シンポジウム開催やニュースレター「天地人」の発行を通して、中国各地における経済開発にとまなう環境問題の実態と対策に関わる本研究拠点での成果を発信するとともに、国内外の中国環境問題に関わる研究ネットワークの形成をはかっています。

2009年11月には、第4回となる国際シンポジウムを「中国における都市化の進展と環境問題」をテーマに上海・復旦大学歴史地理研究所と合同で開催しました。また、シンポジウムの共同開催を契機に、今後復旦大学との共同研究を発展させていくために、MOUを締結しました。

2009年2月に第2回国際シンポジウムをもとにした『中国の水環境問題—開発のもたらす水不足』が勉誠出版より刊行されましたが、今後2008年度の「食と農」、2009年度の「都市化」もあわせて、国際シンポジウムの成果をシリーズで刊行してゆく予定です。



中国環境問題研究拠点のニュースレター『天地人』。年に4回刊行。2010年1月に9号を発行



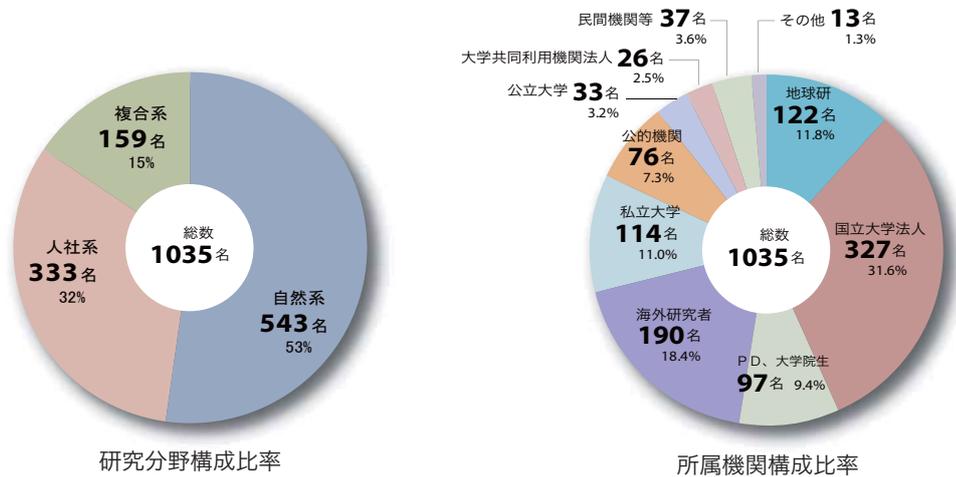
第4回国際シンポジウムの開催に先立ち、地球研と復旦大学のMOUが締結された。MOUを取り交わす立本所長と復旦大学学長代理の満志敏・復旦大学歴史地理研究所長



2009年11月2日に復旦大学で開催された国際シンポジウム「中国における都市化の進展と環境問題」

● 共同研究者の構成比率

地球研は大学共同利用機関として、地球環境学に関わる多くの分野・領域を横断する総合的な共同研究を推進するため、我が国の大学をはじめ、各省庁、地方公共団体（公的機関）や民間の研究機関、さらには海外の研究機関と密接な連携を図っています。



(2009年5月1日現在)

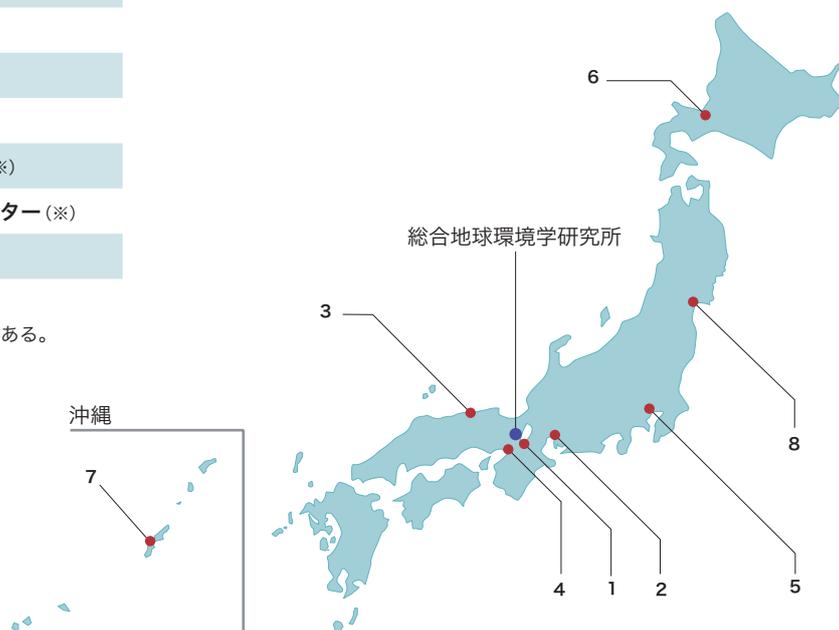
● 国内の連携研究機関

地球研では、以下に示す全国8つの大学研究機関などと連携を図って研究を進めてきました。これら8つの研究機関からは、協定に基づき複数の教員が期間を定めて地球研の研究教育職員として就任しました。第二中期中期・中期計画期間においても、より多くの大学や研究機関と積極的に連携を深めていきます。

連携研究機関

1. 京大大学生態学研究センター
2. 名古屋大学地球水循環研究センター
3. 鳥取大学乾燥地研究センター
4. 国立民族学博物館(※)
5. 東京大学生産技術研究所(※)
6. 北海道大学低温科学研究所(※)
7. 琉球大学熱帯生物圏研究センター(※)
8. 東北大学大学院理学研究科

(※)は流動定数による連携研究機関である。



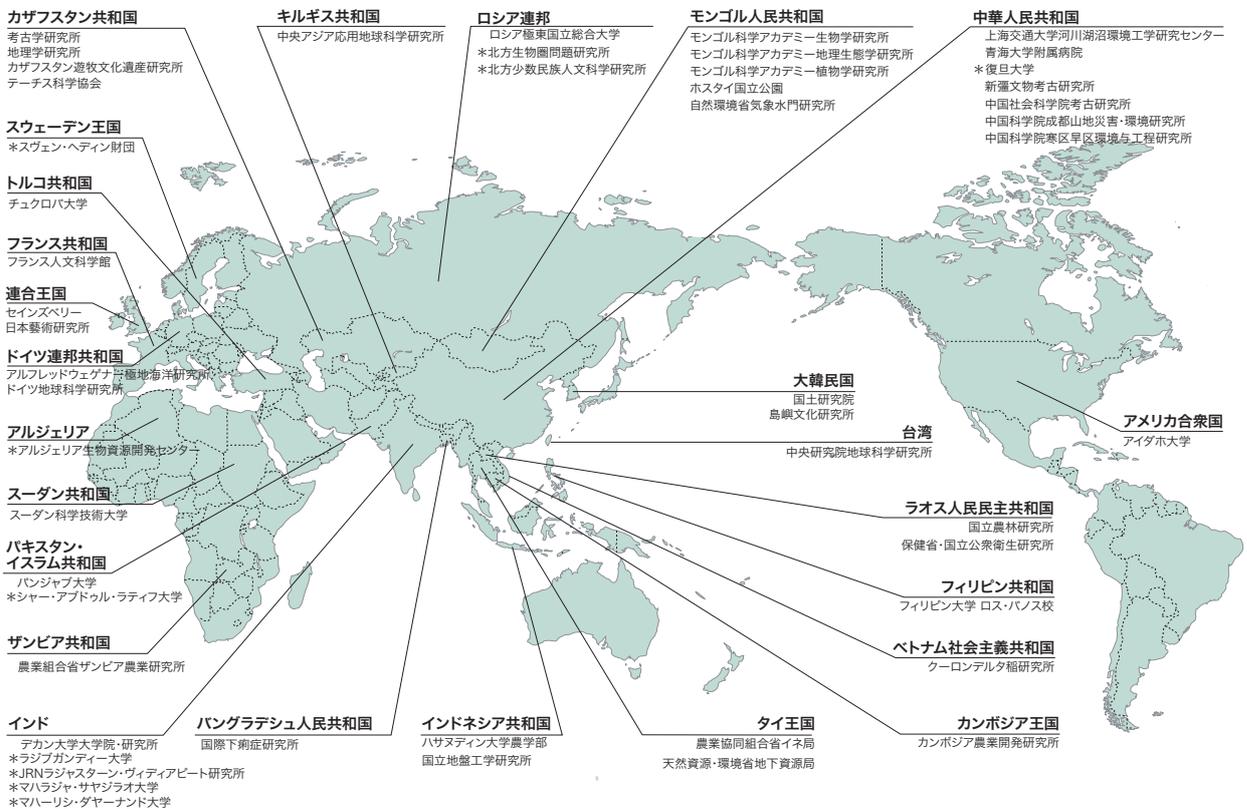
● 海外の連携研究機関

地球研では、世界各国の研究機関・研究所などとの間で積極的に覚書及び研究協力協定を結び、共同研究の推進、研究資料の共有化、人的交流などを進めています。また、海外の研究者との連携をさらに密にするため、招へい外国人研究員として各国から多数の著名な研究者を招いています。

なお、2009年度は、パキスタン・イスラム共和国シャー・アブドゥル・ラティフ大学、中華人民共和国復旦大学、アルジェリア生物資源開発センター など海外の研究機関と8の覚書または研究協力協定を締結しました。

覚書及び研究協力協定の締結 (2010年4月1日現在)

*は 2009 年度に覚書を締結した研究機関



パキスタン・イスラム共和国 シャー・アブドゥル・ラティフ大学との覚書締結 (2009年6月)



アルジェリア 生物資源開発センターとの覚書締結 (2009年12月)

● 地球研国際シンポジウム

地球研の設立主旨や理念を世界に発信することを目的として、国内外の学術コミュニティを対象に年1回開催しています。その年度に終了する研究プロジェクトの研究発表を中心に、最新の研究活動や海外諸国の地球環境研究の現状を紹介しています。



第4回地球研国際シンポジウム
「境界のジレンマ——新しい流域の概念の構築に向けて」

これまでの開催実績

回数	タイトル	開催日	場所
第1回	水と人間生活	2006年11月6日-8日	国立京都国際会館
第2回	緑のアジア——その過去、現在、未来	2007年10月30日-31日	メルパルク京都
第3回	島の未来可能性: 固有性と脆弱性を越えて	2008年10月22日-23日	総合地球環境学研究所講演室
第4回	境界のジレンマ——新しい流域概念の構築に向けて	2009年10月20日-22日	総合地球環境学研究所講演室
第5回	Cultural and Ecological Diversity in Humanized Landscapes (仮題)	2010年10月13日-15日	総合地球環境学研究所講演室 (予定)



第8回地球研フォーラム
「よく生きるための環境——エコヘルスをデザインする」

● 地球研フォーラム

地球研の理念や研究成果に基づいて、地球環境問題について幅広い提起やディスカッションを行うことを目的としています。フォーラム形式にて年1回開催。2004年からは広く市民の理解に供するために、その成果を『地球研叢書』として刊行しています。

(地球研叢書については65ページを参照)

これまでの開催実績

回数	タイトル/開催日(場所: 国立京都国際会館)	
第1回	地球環境学の課題——統合理解への道	2002年 5月17日
第2回	地球温暖化——自然と文化	2003年 6月13日
第3回	もし生き物が減っていくと——生物多様性をどう考える	2004年 7月10日
第4回	断ち切られる水	2005年 7月 9日
第5回	森は誰のものか?——森と人間の共生を求めて	2006年 7月 8日
第6回	地球環境問題としての「食」	2007年 7月 7日
第7回	もうひとつの地球環境問題——会うことのない人たちとともに	2008年 7月 5日
第8回	よく生きるための環境——エコヘルスをデザインする	2009年 7月 5日
第9回	私たちの暮らしのなかの生物多様性(仮題)	2010年 7月10日



第37回地球研市民セミナー
「地球温暖化と水」

● 地球研市民セミナー

地球研の研究成果を分かりやすく一般市民に紹介することを目的に、本研究所または京都市内の会場において定期的に開催しています。会場からは熱心な質問が毎回寄せられています。

これまでの開催実績

回数	テーマ	開催日	講演者
第1回	シルクロード地域のロマンと現実	2004年11月 5日	中尾正義(地球研教授)
第2回	琵琶湖の水環境を守るには——琵琶湖流域での研究活動から	2004年12月 3日	谷内茂雄(地球研助教) 中野孝教(地球研教授)
第3回	亜熱帯の島・西表の自然と暮らし	2005年 2月 4日	高相徳志郎(地球研教授)他
第4回	21世紀をむかえた世界の水問題	2005年 3月 4日	鼎信次郎(地球研助教)
第5回	地球温暖化、ホント? ウソ?	2005年 4月 1日	早坂忠裕(地球研教授)
第6回	地球温暖化と地域の暮らし・環境——トルコの水と農から	2005年 6月 3日	渡邊紹裕(地球研教授) 他

回数	テーマ	開催日	講演者
第7回	鴨川と黄河——その災いと恵み	2005年 9月 2日	福嶋義宏(地球研教授)
第8回	東南アジアの魚と食	2005年10月 7日	秋道智彌(地球研教授)
第9回	生き物の豊かな森は持続的な社会に必要である	2005年12月 2日	中静 透(地球研教授)
第10回	環境の物語り論——環境の質と環境意識	2006年 2月 3日	吉岡崇仁(地球研助教授)
第11回	アムール川・オホーツク海・知床——巨大魚付林という考え	2006年 3月 3日	白岩孝行(地球研助教授)
第12回	モンスーンアジアからシルクロードへ——ユーラシア環境史事始	2006年 4月14日	佐藤洋一郎(地球研教授)
第13回	どうなる日本の自然? どうなる日本の国土?	2006年 6月 9日	湯本貴和(地球研教授)
第14回	なぜインダス文明は崩壊したのか	2006年 9月22日	長田俊樹(地球研教授)
第15回	大地の下の「地球環境問題」	2006年10月20日	谷口真人(地球研助教授)
第16回	「景観」は生きている	2006年12月 1日	内山純蔵(地球研助教授)
第17回	病気もいろいろ——人の医者、環境の医者	2007年 3月 9日	川端善一郎(地球研教授) 奥宮清人(地球研助教授)
第18回	シルクロード——人と自然のせめぎあい	2007年 4月20日	窪田順平(地球研准教授)
第19回	途上国農村のレジリエンスを考える	2007年 5月25日	梅津千恵子(地球研准教授)
第20回	鎮守の森は原始の照葉樹林の生き残りか?	2007年 9月21日	小椋純一(京都精華大学教授) 湯本貴和(地球研教授)
第21回	京都の世界遺産——上賀茂の杜からのメッセージ	2007年10月12日	村松晃男(上賀茂神社権禰宜) 秋道智彌(地球研副所長・教授)
第22回	生きものにとって自然の森だけが大切なのか?——熱帯と温帯の里山	2007年11月 9日	阿部健一(京都大学地域研究統合情報センター准教授) 市川昌広(地球研准教授)
第23回	地域・地球の環境——市民の役割・研究者の責任	2008年 2月15日	石田紀郎(京都学園大学教授) 渡邊紹裕(地球研教授)
第24回	黄河と華北平原の歴史	2008年 3月14日	木下鉄矢(地球研教授) 福嶋義宏(地球研教授)
第25回	マレーシア熱帯林とモンゴル草原の大自然と環境破壊	2008年 4月18日	酒井章子(地球研准教授) 藤田 昇(京大大学生態学センター助教) 山村則男(地球研教授)
第26回	地球環境の変化と健康——人々のライフスタイルを変えるには	2008年 5月16日	門司和彦(地球研教授) 奥宮清人(地球研准教授)
第27回	捕鯨論争——21世紀における人間と野生生物の関わりを考える	2008年 9月19日	星川 淳(NPO法人グリーンピース・ジャパン事務局長) 秋道智彌(地球研副所長・教授)
第28回	年輪年代学——過去から未来へ	2008年10月17日	光谷拓実(地球研客員教授) 佐藤洋一郎(地球研副所長・教授)
第29回	厳寒のシベリアに暮らす人々と温暖化	2008年11月21日	井上 元(地球研教授) 高倉浩樹(東北大学東北アジア研究センター准教授)
第30回	里山・里海から SATOYAMA SATOUMI へ	2009年 1月23日	あん・まくどなど(国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長) 阿部健一(地球研教授)
第31回	南極から地球環境がよく見える	2009年 3月13日	中尾正義(人間文化研究機構理事) 斎藤清明(地球研教授)
第32回	石油資源がなくなったとき、どうやって生活していきますか?	2009年 4月17日	嶋田義仁(名古屋大学大学院文学研究科教授) 縄田浩志(地球研准教授)
第33回	世界の水、日本の水——21世紀の日本の役割	2009年 6月19日	竹村公太郎(日本水フォーラム事務局長・財団法人リバーフロント整備センター理事) 渡邊紹裕(地球研教授)
第34回	万物共存の哲学——環境思想としての朱子学	2009年 9月11日	木下鉄矢(地球研教授) 鞍田 崇(地球研プロジェクト上級研究員)
第35回	中国の環境問題——国際的民間協力の役割と可能性	2009年10月16日	高見邦雄(認定NPO法人緑の地球ネットワーク事務局長) 窪田順平(地球研准教授)
第36回	現代インドの経済発展と環境問題	2009年12月18日	ヴィカース・スワループ(駐大阪神戸インド総領事) 長田俊樹(地球研教授)
第37回	地球温暖化と水	2010年 2月16日	真鍋淑郎(プリンストン大学大気海洋研究プログラム上級研究員) 阿部健一(地球研教授)

● 地球研地域連携セミナー

地球研の研究成果を社会に還元することを目的に、日本各地において年1回程度開催しています。地球研の研究スタッフと地域の有識者が会し、その地域と文化に関わる様々な問題について地域の人々とともに考え活発な議論を行っています。

これまでの開催実績

回数	タイトル	開催日	場所
第1回	雪と人——暮らしをささえる日本海	2005年 9月17日	富山県富山市
第2回	火山と水と食：鹿児島を語る！	2006年 9月18日	鹿児島県鹿児島市
第3回	伊豆の、花と海。——伊東から考える地球環境	2007年 9月15日	静岡県伊東市
第4回	災害と「しのぎの技」——池島・福万寺遺跡が語る農業と環境の関係史	2008年11月 8日	大阪府和泉市
第5回	やんばるに生きる——自然・文化・景観のゆたかさを育む地域と観光	2009年 2月13日 2009年 2月14日	沖縄県名護市 沖縄県国頭村
第6回	山・ひと・自然——厳しい自然を豊かに生きる	2009年11月28日	長野県松本市
第7回	にほんの里から世界の里へ	2010年 2月 6日	石川県金沢市



第6回地球研地域連携セミナー「山・ひと・自然——厳しい自然を豊かに生きる」パネル展示風景



第7回地球研地域連携セミナー「にほんの里から世界の里へ」

● その他

地球研では、その他に次のようなイベントを行政機関、経済団体、学術・研究機関等と連携して開催し、「地球環境学」の構築へ向けて幅広く議論を行っています。

京都環境文化学術フォーラム・国際シンポジウム 「地球環境は私たちみんなのもの——グローバルコモンズを目指して」

地球温暖化をはじめとする環境問題を解決するため、京都府等とともに、環境・経済・文化等の分野にわたる国際的な学術会議を2009年度より開催しています。生活の質を高めながら自然との共生や持続可能な社会を形成する新たな価値観や経済・社会のしくみを、京都から世界に向けて発信・提案することを目的としています。本国際シンポジウムは、「京都地球環境の日」(2月16日)の記念行事と位置付け、「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式と同時に毎年2月中旬に国立京都国際会館で開催いたします。



2010年2月に開催した京都環境文化学術フォーラム・国際シンポジウム「地球環境は私たちみんなのもの——グローバルコモンズを目指して」

KYOTO 地球環境の殿堂

「京都議定書」誕生の地である京都の名のもとに、世界で地球環境の保全に多大な貢献をした実務家、研究者等の顕彰を行います。その功績を永く後世にたたえ、京都から世界に向けて広く発信することにより、地球環境問題の解決に向けたあらゆる国、地域、人々の意志の共有と取組の推進に資することを目的としています。本顕彰は、「KYOTO 地球環境の殿堂」運営協議会（京都府・京都市・京都商工会議所・環境省・国際高等研究所・国立京都国際会館・地球研）が中心となり、環境分野の専門家、学識者、活動家等で構成する選考委員会で選考されます。

また「KYOTO 地球環境の殿堂」入り者の功績は、気候変動枠組条約第3回締約国会議（COP3）が開催された、国立京都国際会館に展示しています。



「KYOTO 地球環境の殿堂」運営協議会会長の立本成文所長より表彰状を授与されるワングリ・マータイ氏

第1回 KYOTO 地球環境の殿堂入り者

受賞者

グロ・ハルレム・ブルントラント（ノルウェー王国）	元「環境と開発に関する世界委員会」（ブルントラント委員会）委員長 元ノルウェー首相
真鍋淑郎（アメリカ合衆国）	プリンストン大学大気海洋研究プログラム上級研究員 日本学士院客員
ワングリ・マータイ（ケニア共和国）	元環境・天然資源・野生動物省副大臣 2004年ノーベル平和賞

日文研・地球研合同シンポジウム

本シンポジウムでは、日本文化や自然思想の立場から地球環境問題を問い直し、人間文化研究機構における新しい人間文化研究の可能性として、日本文化の研究が地球環境問題にいかなる貢献をすることができるかについて提案することを目的としています。

日本文化と地球環境問題、大きく異なる2つの分野の研究を進めている国際日本文化研究センターと地球研が中心となって、地球環境問題の本質について積極的に対話しています。



第2回日文研・地球研合同シンポジウム
「京都の文化と環境——水と暮らし」

これまでの開催実績

回数	タイトル	開催日	開催場所
第1回	山川草木の思想——地球環境問題を日本文化から考える	2008年6月21日	シルクホール
第2回	京都の文化と環境——水と暮らし	2009年5月9日	日文研講堂
第3回	京都の文化と環境——森や林	2010年5月22日	日文研講堂

地球研東京セミナー

地球研の第一期の成果と今後のさらなる進展について、国内の研究者コミュニティ等にさらなる理解と協力を呼びかけていくため、東京でのセミナーを開催しています。2009年度に開催された東京セミナーでは、特に第二期で重要な地球環境問題の一つとして取り上げる「水」をテーマに人文学の視点と地域から地球を見る目も重視した「水研究」のあり方について、日本を代表する研究者・関係者と討論が行われました。



地球研東京セミナー「人・水・地球——未来への提言」

地球研東京セミナー「人・水・地球——未来への提言」実施内容
2009年10月9日 霞山会館

	講演者等	タイトル
全体司会	渡邊紹裕(地球研教授)	
基調講演	谷口真人(地球研教授)	人と水の未来 ——多様な知恵をつなぐ地球研の試み
パネル発表	伊藤宏太郎(愛媛県西条市長)	「水資源は売らない」をキャッチフレーズに ——産・官・学連携のまちづくり
	沖 大幹(東京大学生産技術研究所教授)	世界の水問題と分野統合的学術研究
	川戸章嗣(月桂冠株式会社常務)	京都・伏見の酒造りと地下水の保存
	竹村公太郎(日本水フォーラム事務局長)	気候変動と日本の役割 ——地球のセンサー日本列島
	中庭光彦(多摩大学准教授・ミツカン水の文化センター)	社会的水循環を支える水文化
	安成哲三(名古屋大学地球水循環研究センター教授)	アジアの水はどうか？
パネルディスカッション司会	秋道智彌(地球研副所長・教授)	

地球研セミナー

国内・海外の研究機関で地球環境関連の研究を行っている精鋭の研究者を講師として招へいし、地球環境学に関わる最新の話題と研究動向を共有することにより、広い視座から地球環境学を捉えようとするセミナーです。セミナーは所外にも開かれており、所員だけではなく関連分野の研究者も多数参加しています。

談話会セミナー

談話会セミナーはお昼ごはんを食べながら行うランチ・セミナーです。地球研では、多様な研究分野に対する相互の理解とともに、地球環境問題という共通テーマに沿った不断の議論を重ねることが求められています。座談会セミナーでは、地球研の若手研究者を演者として、各自の研究バックグラウンドを踏まえつつ、多くの所員にとって共通の話題を提供し、研究者相互の理解と交流を深めることを目的として開催しています。

2009年度開催実績

タイトル	開催日	演者
プロジェクト研究発表会ワーキンググループの経過報告	2009年 5月13日	大西健夫
淡水域におけるコイヘルペスウイルスの検出と定量	2009年 5月20日	源 利文
外洋と陸域をつなぐ沿岸学の試み——沿岸域でモノはどう動くのか？	2009年 6月 2日	中田聡史
中国農業の土地生産性変化とエコロジカルフットプリント	2009年 6月16日	豊田知世
国際法の断片化と統合の狭間で	2009年 6月30日	花松泰倫
「視える世界」と「視えない世界」にむけられる文化人類学の視座	2009年 7月 7日	中村 亮
建築が変わるとき - インドネシア・メダンにおける植民地期の高床式住宅を事例として	2009年 9月15日	林 憲吾
アフリカ内陸半乾燥地の穀物農業——チャド湖の事例から考える	2009年 9月29日	石山 俊

● 刊行物

地球研叢書

地球研の研究や成果の意味を学問的に分かりやすく紹介する出版物です。

タイトル	著者・編者	出版社	出版年月
1 生物多様性はなぜ大切か？	日高敏隆 編	昭和堂	2005年4月
2 中国の環境政策——生態移民	小長谷有紀、シンジルト、中尾正義 編	昭和堂	2005年7月
3 シルクロードの水と緑はどこへ消えたか？	日高敏隆、中尾正義 編	昭和堂	2006年3月
4 森はだれのものか？	日高敏隆、秋道智彌 編	昭和堂	2007年3月
5 黄河断流——中国巨大河川をめぐる環境問題	福島義宏 編	昭和堂	2008年1月
6 地球の処方箋——環境問題の根源に迫る	総合地球環境学研究所 編	昭和堂	2008年3月
7 食卓から地球環境がみえる——食と農の持続可能性	湯本貴和 編	昭和堂	2008年3月
8 地球温暖化と農業——地域の食料生産はどうなるのか？	渡邊紹裕 編	昭和堂	2008年3月
9 水と人の未来可能性——しのびよる水危機	総合地球環境学研究所 編	昭和堂	2009年3月
10 モノの越境と地球環境問題——グローバル化時代の〈知産知消〉	窪田順平 編	昭和堂	2009年6月
11 安定同位体というメガネ——人と環境のつながりを診る	和田英太郎、神松幸弘 編	昭和堂	2010年3月

地球研ライブラリー

地球研の研究者らが自らの研究成果を広く紹介する学術出版物です。

タイトル	著者・編者	出版社	出版年月
1 クスノキと日本人——知られざる古代巨樹信仰	佐藤洋一郎 著	八坂書房	2004年10月
2 世界遺産をシカが喰う	湯本貴和・松田裕之 編	文一総合出版	2006年3月
3 ヒマラヤと地球温暖化	中尾正義 編	昭和堂	2007年3月
4 Indus Civilization: Text and Content	長田俊樹 編	Manohar	2007年3月
5 人はなぜ花を愛でるのか	日高敏隆・白幡洋三郎 編	八坂書房	2007年3月
6 農耕起源の人類史	ピーター・ベルウッド 著 長田俊樹、佐藤洋一郎 訳	京都大学 学術出版会	2008年7月
7 モンスーン農耕圏の人びとと植物 (ユーラシア農耕史1)	佐藤洋一郎 監修 鞍田 崇 編	臨川書店	2009年1月
8 日本人と米 (ユーラシア農耕史2)	佐藤洋一郎 監修 木村栄美 編	臨川書店	2009年4月
9 砂漠・牧場の農耕と風土 (ユーラシア農耕史3)	佐藤洋一郎 監修 鞍田 崇 編	臨川書店	2009年7月
10 Indus Civilization: Text and Context. VOLUME II	長田俊樹 編	Manohar	2009年9月
11 Linguistics, Archaeology and Human Past in South Asia	長田俊樹 編	Manohar	2009年9月
12 さまざまな栽培植物と農耕文化 (ユーラシア農耕史4)	佐藤洋一郎 監修 木村栄美 編	臨川書店	2009年10月
13 農耕の変遷と環境問題 (ユーラシア農耕史5)	佐藤洋一郎 監修 鞍田 崇 編	臨川書店	2010年1月

地球研ニュース (Humanity & Nature Newsletter)

地球研として何を考え、どのような活動を行っているのか、また所属には誰がいて、どのような研究活動をしているかなどの最新情報を、研究者コミュニティに向けて発信するもので、隔月で刊行しています。No.16から内容体裁をリニューアルし、それに合わせて編集室を充実させました。特に地球研に関わっている内外の研究者を対象に、コミュニケーションの場の1つとして機能することをめざしています。

